

# 魔法のプロジェクト FY23 活動報告書

報告者氏名: 房前 千里 所属: 守口市立よつば小学校

記録日: 2024年 2月 19日

キーワード: 読み書きの代替手段、スケジュールの理解と不安感の軽減

## 【対象児の情報】

・学年 小学校2年生

・障害名 ASD、ADHD、LD (2024年診断)

・障害と困難の内容

○読み書きへの負担感が強い。予測変換の中から正しい漢字を選ぶことはできるが、自分で書くとうまくいかない。

○環境の変化に大変敏感である。また、集団の場に参加することへの過度な不安がある。

## 【活動目的】

・当初のねらい

①安定して1日を過ごせるようになる(登校から下校まで)。

②学習面の困り感を軽減していく。

・実施期間 2023年5月～2024年2月

・実施者 房前 千里 (特別支援教育士、公認心理師、臨床発達心理士)

・実施者と対象児の関係 自閉症・情緒障がい学級担任

## 【活動内容と対象児の変化】

### 対象児の事前の状況

#### ◇進級による環境の変化のため

○登校

・校門の付近までは来るが、声をかけても門の中に入りにくかった。(4月当初2週間)

○教室への移動

・一旦校内へ入っても、再び校門付近に下靴を置きに行ったり、門の付近から離れられなかったりすることがあった。

・2年生教室に近いフリースペースに荷物を置き、付近のカーテンにくるまっていたり、隠れたりしていることが度々あった。

また、児童自身がどこに荷物を置いたか分からなくなり、不安定になることがあった。

・2年生から特別支援学級に入級した。特別支援学級の教室に入室することはできるが、教室内で過ごしてもよいと説明しても不安な様子であった。

#### ◇学習について

○聞くこと・話すこと

・静かな環境であれば、着席して話を聞くことはできる。しかし、後で確認すると「そんなこと聞いたかな」ということがある。また教員に話しかけられると叱られると思いついてその場を立ち去ったり、その場から離れられなくなったりすることがある。

・児童と教員の一对一の場面であれば、身近な出来事について話すことはあるが、詳しく聞かれると黙ってしまう。また、長時間気分が安定しないときには、音声会話より筆談の方が応じやすい様子が見られた。

○読むこと

・教科書の音読はするが、文末の読み間違いや、勝手読みが見られる。また、選ぶという行動が苦手であり、図書室で本を借りて帰ることは少ない。

○書くこと

・書くことにはとにかく負担感があり、書きたがらない。ひらがな五十音をかくことができるが、特殊音節の表記は苦手である。

・手本を見て書いても、正しい字形で漢字を書くことは難しい。

○ことばの理解

・ものの名称は理解していても、その属性について問われると答えられなかったり、会話の途中で「どういうこと?」と問い返したりしてることが多い。事前に予定を知らされていても、状況の予測が伴っておらず、どの教室で学習する時間か、何の教科の時間なのか本人の中で曖昧なことが多い。

◇情緒面・感覚面

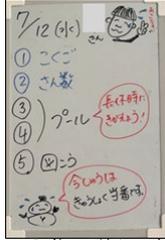
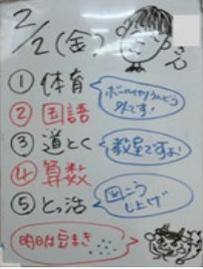
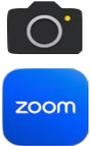
・ブランコで回転刺激を求めたり、砂場での泥遊びや、あちこちの水たまりに入ったりするなど、感覚遊びに没頭する姿が見られるようになった。また、上靴を履かずに過ごしたり、体操服に着替えたりすることを極端に嫌がる。

・集会など苦手な場面に近寄ろうとしない一方で、普段は早く帰宅したがるのに、下校時刻が来てもいつまでも下校せず、その場に居続けることがあった。

・児童が活動の場を離れて身を隠してじっとしていても、活動が回避できて安心している訳ではなく、静かに泣いていたり、時間が過ぎるのを待ち続けていたりする様子が見受けられる。

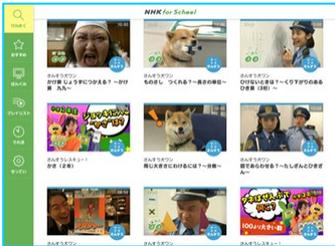
・活動の具体的内容

①安定して1日を過ごせるようになる

| ねらい   | 使用したアプリや道具   | 活動の内容   |
|---|--|---|
| <p>○スケジュールについて</p> <p>①児童が教員と一緒に1日のスケジュールを見て、確認する。(1学期)</p> <p>②児童が自分でスケジュールを確認する。(文字やシンボルだけでなく、音声でも確認できる)</p> <p>③児童が自分でスケジュールを確認して移動→授業に参加(3学期)</p> |  <p>△支援学級内で</p>  <p>△Drop Tap</p>  <p>△通常の学級で</p>   | <p>・特別支援学級内では1日の時間割通りに給カードを児童が自分で貼って確認する。</p> <p>・通常の学級では児童がよく使う入口付近に担任が掲示(最新情報)。</p>  <p>・iPadでシンボル・文字・音声を使用して確認する。iPadなら持ち運びが容易であり、校外学習にも持参した。</p> <p>・通常の学級担任も年間を通してスケジュールを掲示し、児童はそれを見て1日の予定が入った状態で過ごすことができるようになった。</p> |
| <p>○リハーサルをして不安感①②を軽減</p> <p>①どのタイミングで教室に入ればよいか分からない</p> <p>②どのような活動をするのか予測がつかない</p>   |   <p>△ピアノの練習を録画</p>  | <p>①専科の教員が指導する音楽の授業では見学席を予約。先に入室しておく。</p> <p>②教員や児童自身が演奏する様子を録画。学習内容の予習。</p> <p>③オンラインで参加する。</p>  |

|                      |   |  |
|----------------------|---|--|
| <p>○環境の調整と集団への参加</p> |  <p>△イヤマフ</p> <p>△Drop Tap</p> | <p>・うるさい場所は苦手であると話していたことから、必要時にイヤマフを使用。(体育館で行われる集会など)</p> <p>・活動に必要な行動を順に Voca アプリで確認。</p> |
|----------------------|---|--|

②学習面の困り感を軽減していく

| ねらい  | 使用したアプリや道具   | 活動の内容  |
|--|--|--|
| <p>○読みの負担を軽減し、内容理解を促す。</p>   |  <p>△学習者用デジタル教科書</p>  |  <p>・読み上げ音声聞き、iPadのワークシートに文字入力。</p>   |
| <p>○書きの負担①②を軽減し、紹介文を書く。</p> <p>①どのように書けばよいか分からない</p> <p>②枠線の中に収まるように文字が書けない。</p>               |  <p>△Keynote △写真</p>    | <p>①予め入力しておいても差支えない箇所は教員が先に入力。</p> <p>②枠線を複数設定し、観察した様子や感じたことのみを五十音キーボードで児童が入力。</p>    |
| <p>○児童が安心して取り組める方法を教員と探り、うまくいった経験を積み重ねる。</p> <p>学び方のスタイルを変えてみる</p> <p>①動画やプレゼンテーションアプリを使って</p> |    | <p>・拡大した図にデジタルペンシルで印をつけることで、1cm=10mmを確かめた。</p>  <p>・NHK for Schoolで学習内容を確認したり、教師が実物操作をする姿を児童が撮影したりして、keynoteに学習内容をまとめた。</p> |

②アプリで繰り返し取り組む



・間違っても心理的負担が少なく、児童はゲーム感覚で取り組めることから10の合成や分解、かけ算など自動化することが必要な課題にはiPadで繰り返し取り組んだ。また、自分は線を書くのが苦手だからと他の児童が取り組んでいた「もじルート」にも自分から取り組んだ。

③スマートスピーカーを使用して



△Alexa

・文字入力や、音声入力には当初、教員の手助けが必要であった。そこで、スマートスピーカーを使って質問をしたり、画像検索をすることにした。

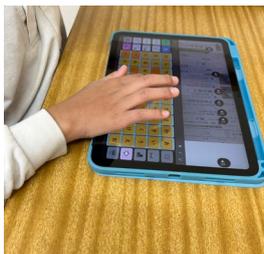
△友だちと一緒にディスプレイ型スマートスピーカーで画像検索をする様子



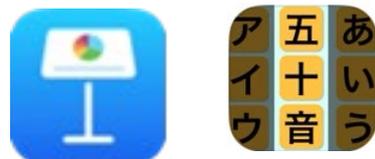
△ペンギンを画像検索

④テストへの取り組み

自分で回答し、成果を発揮する

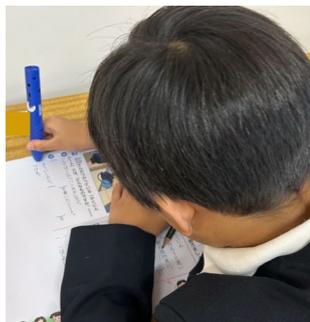


△iPadを使用してテストに取り組む様子



△Keynote △ごじゅーおん

・児童と話し合い、2学期から国語のテストをiPadを使用して行うことにした。五十音キーボードを使ったり、フリック入力を使用するなど、児童が取り組みやすい入力方法を使用して回答している。



△音声ペンで問題文を聞き取る様子

音声ペン



△児童が自分で入力したテスト。問題文の読み上げ音声は教員の声で添付。

・聞き取りのテストでは、別の方法も試してみたいとシールに録音した問題を再生する音声ペンを使用した。

## ・対象児の事後の変化

### ①安定して1日を過ごせるようになる

#### ○スケジュールについて

通常の学級では、プールの始まる6月ごろからその日の時間割に加え、どのタイミングで着替えればよいかなど、短いメッセージを入れたボードを児童が決まって出入りしている入り口付近に担任が毎日掲示した。その結果、「今日は〇〇があるらしい」と見た情報を伝えてくるようになった。また、運動会の練習が始まる10月ごろには、見て確認することが日常化し、体操服に着替えることができるようになった。さらに、3学期からは通常の学級で朝の学習に参加したり、一日の予定を聞いたりする等、促されなくても友だちと一緒に着席して担任を待つことができるようになった。

児童は特別支援学級でも当初、何をどの程度学習するのか予測がつきにくく、教室に入ってもすぐに出ていこうとする姿が見られた。また、落ち着いて話すことができるようになった2学期でも、時刻よりも、給食の時間を基準にいくつ前かで判断しているような言動が見られた。学習に取り組みやすくする方法は他にもなく、本人にわかりやすい時間軸と学習内容を提示しておくことであった。時刻は読めても、校時時刻表と対応してみることが難しく、いつ学習が終わるのが分かりにくかったのである。そこで、時刻と学習内容を対応させ、児童が分かりやすい方法に変更した。現在では、いつまでにどの課題に取り組みばよいのか、手順表とファイルの色を手がかりに、確認しながら児童が自ら取り組んでいる。また、スマートスピーカーでタイマーをセットしたり、ドラえもんの声で時刻を確かめたりしながら学習に取り組む様子が見られる。



△授業の時刻や課題に取り組む順を提示

#### ○リハーサルをすること

事前にリハーサルが可能な内容は、特別支援学級の担任と一緒に予め取り組んだり、実際にその場に行き、立ち位置や動き方を確認したりするようにした。また同じ学年の別のクラスの児童から、専科の教員が担当する授業の学習内容を、児童の前で意図的に聞くようにした。すると徐々にではあるが活動に参加できるようになった。どうしても参加しにくい時には、オンラインでの参加も試みたが、余計に不安になって教室へ走って行き、カメラをオフにしてくる等の落ち着けない行動が出てしまった。友だちと「同じ方法で学習しなければいけないのではないかと常に話し、別の方法で参加することへのためらいが強かった。そこで専科の授業の際には、授業開始後しばらくしてから、通常の学級担任が授業の様子を伝え、参加を促しに来ることで、毎回というわけにはいかないが参加できる時間が増えてきた。また、担任が促しに来られない時には、別の教員に付き添ってもらえないか児童が職員室へ声をかけに行くようになった。事前に情報が入れば、「ぼくのタイミングで教室へ入るから」と自分の気持ちを調整している言動も見られる。また、うまく参加できなかった場合にも「今日は～だからむりだった」と自分を振り返る言動が見られるようになった。

#### ○環境の調整と集団への参加

1学期の終業式には、体育館の入り口付近には移動してくるが、館外から中の様子を伺うのが精いっぱいといった様子であった。しかし、2学期の始業式には、友だちに促されて体育館に入り、一貫して座位姿勢ではあったが落ち着いて参加することができた。また、運動会の練習ではダンスの振り付けを教える教員の横に行き、近くでモデルを見ながらダンスの練習をすることができた。ポンポンの触感覚が嫌だと自分で言うこともでき、長袖着用で腕にポンポンのゴム部分を通すという方法で納得してダンスに参加できた。また、それ以外の競技の練習にも事前に説明しておけば、集団から離れることなく概ね参加できた。3学期は友だちと一緒にほとんどの活動に参加することができている。

### ②学習面の困り感を軽減していく

#### ○書くこと

通常の学級で安心して過ごすためには、教室に掲示される学習の成果物(観察カードや日記など)を提出し、教室

内に「友だちと同じように掲示されている」ということが鍵となるのではないかと当初から通常の学級の担任と確認していた。但し、手書きで絵や文字に表すことが苦手な児童にとっては、負担感が大きいだろうとも予測していた。そこで、家庭ではゲームや動画を見ることが好きである児童なら、自分で検索するスキルを身に付け、文字入力ができるのではないかと考えた。まずは、写真を撮って貼り付けたり、50音キーボードを使ってキーワードだけを入力したりするところから初めた。衝動性のある児童にとって、50音キーボードではタッチミスが多く、あきらめようとするこもあつた。一方、まだ早くはないが、フリック入力の方が正確に入力することができる。

同じ場で、同じ方法で学んだのではなくても、学習の成果物が掲示されていることで他の児童から認められる機会があつた。絵ではなく写真を、手書きではなく入力した文字であっても、その形式について「どうして?」と声をかけられることはなく、他の児童と同様に内容について聞かれることの方が多かつた。

現在では、気分が安定していれば iPad で表示したテストに、フリック入力でも回答することができるようになっている。しかし、手書きの方が明らかに早く済ませることができる課題は、自分で書くことも選択している。テストについては、いまだに文字数の多さに児童が圧倒され、すぐには取り組みにくいこともある。iPad で入力して回答することを児童が選べば、できるように設定はしてある。テストは気分が落ち着いている時に児童が選んだ方法で取り組むようにしている。

宿題については、保護者の見守りや声かけて忘れずにやってくるが、漢字ドリルの宿題など書字に関してはうまくいかないことがある。但し、漢字を覚えるという点では、ランダムに並んだ漢字の中から正確に選び取るということができる。教員が正答を入れ忘れた時にも、画数の少ない漢字であれば自分で想起して書いたり、「〇〇という漢字がない」と伝えたりすることができる。

#### ○読むこと

音読については、まとまり読みができるようになり、家庭で行った音読の宿題を GIGA 端末に録画して持ってくるようになった。聞きなれない言葉はスマートスピーカーに聞いたり、iPad で文字入力をして検索したりしている。また、何より「どういうこと?」と教員に落ち着いて聞けるようになってきた。

テストについては、いまだに文字数の多さに圧倒されて、すぐには取り組みにくいこともあるが、iPad 上で入力して回答できるように設定してある。気分が落ち着いている時に取り組むようにしている。

#### ○聞くこと・話すこと・ことばの理解

去年は机の下でじっとしていたり、フリースペースのカーテンにくるまったりすることで多くのことを回避してきた児童が、言葉を介して、友だちや教員とやり取りができるようになったことは、大いなる成長である。一方、聞き取った情報を字義どおりに捉えてしまい、誤った解釈のまま過ごしていることや、同じことを話しているのに、言い回しによって別の事柄であると認識していたりする等、混乱する様子は時々見受けられる。混乱している場合は、その都度解決し、家庭とも連携しながら児童に必要な概念や言葉を育むことを今後も続けていく。

### 【報告者の気づきとエビデンス】

#### ・主観的気づき

☆児童はスケジュールなど、視覚的な情報を自分で確認するスキルを身に付けたことによって、漠然とした不安感が減り、通常の学級での学習にも参加できるようになった。

☆自分に合った方法で、学習をやりきったという経験が積み重なり、やってみようかなということが増えた。そのため、友だちと一緒に学習することへのハードルが下がってきている。

#### ・エビデンス

##### ①視覚支援と学習の状況

Ⅰ学期当初は不安感が強く、フリースペースにいたり、グラウンドに出てブランコをこいだり、砂場にいることが多かつた。

しかし、時間割や学習内容を自分で確認するようになると、通常の学級で参加できる教科も増えてきた。図工や生活の時間に参加できず、後から支援学級で学習した際にも、担任が作成した手本や友だちの進捗状況を写真に撮って児童と確認し、必ず同じ時期に仕上がるようにした。

児童の授業への参加状況 (児童が選択した学びの場 特別支援学級: 通常学級)

4月 → 9月 → 1月 → 2月末

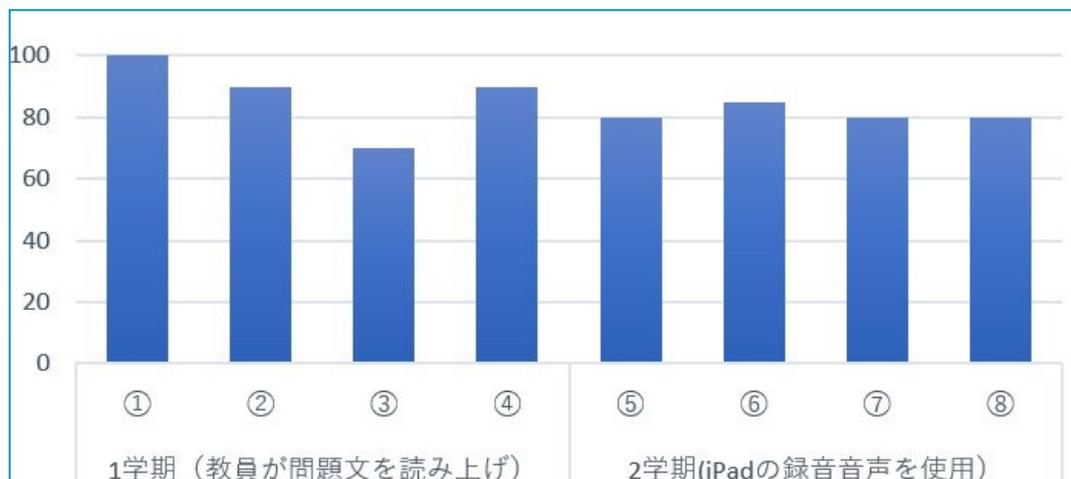
| 教科     | 1学期    | 2学期         | 3学期           |
|--------|--------|-------------|---------------|
| 国語     | 通常学級   | 通常学級        | 特別支援学級        |
| 算数     | 通常学級   | 通常学級        | 特別支援学級        |
| 生活     | 通常学級   | 部分参加        | 必要時に担任が補助     |
| 体育     | 着替えはせず | 促されると着替えて参加 | 自分で着替えて参加     |
| 図工     | 通常学級   | 部分参加        | 必要時に支援学級担任が補助 |
| 音楽     | 通常学級   | 部分参加        | 必要時に担任が補助     |
| 図書(国語) | 通常学級   | 通常学級        | 通常学級          |

部分参加と記してある教科は、1時間のうち、サポートしてくれる教員と一緒に一部参加した教科である。3学期にもサポートしてくれる教員がいなか職員室に来ることはあるが、概ね授業の開始から教室で着席することができており、担任の丁寧なサポートがあれば学習が成立するようになってきている。但し、児童にとっては十分に見て確認することが落ちていて学習が成立するための必須条件であるので、許容される範囲内で友だちの様子を見てから取り組むことを認めながら指導を行っている。

## ②読み書きの代替手段を活用したテストの状況

1学期には、国語のテストでは、教員が問題文を読み上げ、児童が解答していた。問題数は少ないが、取り組むまでに非常に時間がかかり、本人の疲労度も高かった。また、他の児童が学習に来ない時間帯でないと、集中してテストに取り組むことは難しかった。そこで、2学期からはiPadに録音した読み上げ音声を納得が行くまで児童が自分で聞き、自分で入力して回答するようになった。

### 国語の単元テスト思考・判断・表現の得点の変化



2 学期は自力で回答しているため、テストで誤答や空欄があっても、これでよいと本人が納得してテストを終えることができた。しかしそれでも、8 割ほどの得点は安定してとることができている。3 学期は、通常の学級で学習しなければならないという児童の思いが先行し、実際に通常の学級で授業を受けたが、学習内容を十分に習得することは難しく、テストを受けること自体にも拒否感があったため記載していない。

## おわりに

この実践を通して、児童にとってのインクルーシブ教育とは何か考えた。児童は保育園・幼稚園まではみんなと一緒に過ごさせていたのに、小学校に入った瞬間から何年も積み重ねてきた園での生活のパターンが一転し、どうしてよいか分からない状態に陥ってしまった。運動会の練習でも、集団のそばまでは来るものの、練習には参加できず、人工芝のラインの上を歩いているだけだった。しかし、本番は参加した。ずっと見ていたからだ。「見ること」、そして落ち着けない時は話さないけれども、筆談には応じ、応じるうちに落ち着いていくということに気づいたことから、特別支援学級への入級も決まった2年生での予想図を描き始めた。

しかし、「見ること」をどこまで許容するかという課題もある。運動会のダンスの練習では、初日から舞台の上になり、指導する教員のそばで見て踊り始めた。このことには大変驚いたが、指導する教員をはじめ子どもたちも誰一人としてそのことを責めたりせず、いっしょに練習した。また、来室予定の欄に名前があるのに、授業開始時に児童がいないと、特別支援学級の児童は必ず心配し、通常の学級でも席を空けていると「さっきはどうしていたの？」と必ず声をかけてくれる。通常の学級の担任はいつでも、途中からでも授業に参加できるようにと必ず用意をしてある。また、「今から〇〇をするから、最初からいても大丈夫だよ」と学習内容をグラウンドで過ごしている児童に伝えておく。そして必ず側にある職員室からグラウンドを教員が見ている。しばらくすると迎えに行く。時には一緒に遊ぶ。受け入れてもらっていると分ると、「大勢の中でがやがやなっているのは、ぼく、にがてやねん。」と話せるようになった。話せるようになると、本人とも折り合いがつけやすくなる。

ICTの活用で、苦手な読み書きはきっと代替できるようになると予測はついた。しかし、その方法をまず児童が受け入れることができるかは本人次第であった。だが、受け入れた。また、この方法を周囲に受け入れてもらえるか、大人は一様に心配しているが、「インクルーシブされるための人的環境は、今のところ大人も子どもも整った」というところで本実践は終わりに近づく。大人の思い込みや見立てを優先するのではなく、児童自身がどうなりたいと願っているか、学ぶ場を同じにするというだけでなく、どのように学んでいきたいのか丁寧に対話をしていくことが、今後の児童の学びの積み重ねへの鍵となるだろう。